

板倉に終の棲家を探し当てた ご一家

千葉県 伊藤 紀（南城町3丁目出身）

ふるさと上越（高田）から上京して五十年になる。

二年も経てば古希だと云うのに実直さが災いしてサラリーマンを続けている。数年前からJネットふるさと越後大使を拝命しているが、日常の雑事や趣味（菜園、ゴルフ、囲碁、そして仕事）などに追われ、なかなか大使の役目を果たせないでいる。

先日、私が勤めている会社へ仕事でよくお見えになっている大竹さん（東京都出身、埼玉県在住）が、気に入った古民家が見つかったので上越市の板倉に奥さんと移り、永住すると言ってきた。大竹さんは、会社へ見えるようになって七、八年になるが、私と年齢がほぼ同じで、いつも話題が豊富で仕事そっちのけで愉しくしゃべり帰ってしまつことが多かった。

ただ初めはお酒の失敗談が多かった気がする。

いつからか私が越後大使とわかると、越後の話題が多くなり越後ファンで越後通いをしていること、上杉謙信や小川未明などの人となりを熱く語ることも多くなった。

「雪、古民家、農業にアコがれているんだ」「女房と連れ立ち越後訪問は二十回を超えましたよ」「上越の古民家は日本一です」「積雪の世界記録を持つ板倉に住めれば最高です」などなど興奮気味でした。酒好きの大竹さんにとっては、酒どころであることもすこく気に入ったのでしょう。

表参道にある「にいがた暮らし相談窓口」や上越市役所にある「上越市ふるさと暮らし支援センター」などへも顔をだ

し勉強されたようです。今、冬場の雪はどうなんだろう。曇天が続く雪国の冬にすぐ逃げ帰りはしないか。心配もしている。

越後へ住みたくなった気持ち書いてくれませんかとお願したら、数日後に奥様が書かれた随筆を持ってきてくれました。奥様は新聞などへよく投稿されているようです。

大竹さんとの出会いが、ふる里を知らない越後大使をふる里のすばらしさに目覚めさせ、また永く離れていたふる里上越をすこく近くに引き寄せてくれたような気がしています。

取り寄せた深雪花（岩の原ワイン）を一人飲みながら、今年はお父とおふくろの墓参りに女房と行ってみるかと思ったり、サラリーマンを卒業したら越後の歴史を勉強してみようかと思ったりしています。今日も上越にはきつと「美しい風」が吹いている事でしょう。

大竹夫人の「美しい風」をお読み下さい。



左：伊藤さん、右：妹さん